

なにしてあそぶ？

—遊びの工夫を通して関わりを広げていく子ども—

岩本和貴

1 低学年での取り組みの概要

人間領域の冒頭文でも述べたように、最近ひとり遊びをする子が多い。特に入学したばかりの1年生は、集団を作って遊ぶようになるまで時間がかかる。しかし、決してひとり遊びだけが好きなわけではない。子どもたちからは、もっとみんなと遊びたい、楽しみたいという強い欲求を感じる。集団づくりが苦手なだけであろう。そこで低学年を中心に、遊びの活動の中に子どもたちの同士の関わり場を設定し、自然な関わり合いがもてるように考えた。中・高学年では、低学年の活動をさらに広げ、友だち以外の人との関わりも考える場を設定している。

2 「わくわくランド 1-1」の実践から

(1) 活動の主題

子どもたちは4月当初から、いろいろな「遊び」を通して人間関係を広げている。「遊び」の中でさまざまな体験をし、価値観を身につけていく。ある意味で、「遊び」はひとつの学習（＝自ら学ぶ場）であると考えられる。また、「遊び」はそれ自体が魅力的で、楽しい活動である。

本学級の子どもたちは生活のリズムが定着し、友だちに対する理解も少しずつ深まっていった。しかし、仲良しが特定の子に限られ、人間関係が広がりにくい子、深まらない子、一緒に外へ出ているだけで思い思いに別々の活動をしている子など、関わりをうまくもてない子もいる。友だちとトラブルを起こしたときも、相手の思いへの考えが及ばず、うまく解決できない場合がある。冒頭文にもあるように、理由はいくつか考えられるが、遊ぶ機会と時間のなさが大きなものであろう。

そこで、子どもたちの自然な遊びの中で、自分の思いを大切にし、気持ちを解放すると同時に、相手の思いを取り入れながら一緒に遊ぶことができるように、「わくわくランド 1-1」を設定した。廃品物を利用したのは、それらを使って遊ぶ際、遊び方に工夫が必要になると考えたからである。自然に材料に自分の思いをこめて遊ぶようになるだろう。同時に、何人かで一緒に遊べば、その楽しみが更に大きくなることに気づかせたいと考えた。また、今後の環境学習へのきっかけづくりとして、身の回りのものを生かして楽しく遊べる経験をすることで、リサイクルへの意識が芽生えるようにすることもねらった。

(2) 活動のねらい

- ① 友だちと一緒に遊ぶことで、より楽しく遊べるようにする。
- ② 身の回りのものを工夫して、楽しく遊ぶことができるようにする。

(3) 活動への具体的な支援

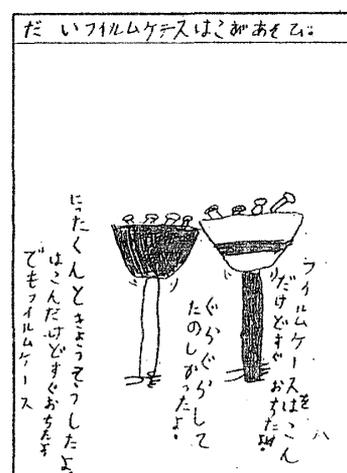
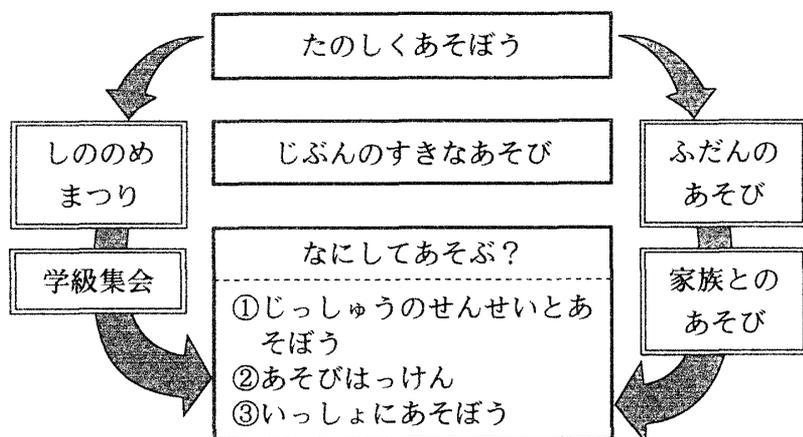
支援は、自分なりにさまざまな工夫ができること、自分の思いつきにこだわりをもてること、他の子と一緒に遊ぶ楽しさに気づくこと、の3点を特に意識して、次のように行った。

- ① 材料を吟味し、「自分たちの手で集めてきたんだ」「放っておいたらゴミになっていたかもしれないんだ」という意識をもたせ、材料そのものにこだわることをできるようにした。
- ② 活動に見通しがもてるように、やってみたい遊びについて、その都度事前に絵や文に表現する場を設定した。

- ③広い活動場所を確保することで、活動の創造性を保障した。
- ④子どもの考えはできる限り肯定的に評価し、発表する場を設定したり、紹介したりした。
- ⑤気に入った友だちの考えは、どんどん真似するように指示した。
- ⑥細かな指示は控えて、子どもたち自身の考えや行動に責任をもてるようにした。
- ⑦集団で遊ぶ姿を取り上げて評価し、関わって遊ぶ楽しさに気づくことができるようにした。
- ⑧時間毎に楽しかった遊びを絵や文で表現する場を設定し、活動をふりかえるようにした。

主なものを挙げたが、とにかく子どもたちの自然な関わり合いに対して、あまり指導者の作為が働かないようにした。子どもたち同士の意見対立などのトラブルも、具体的な解決法を提示せずに、どうするか見守るよう心がけた。また、ひとり遊びについても好ましくない遊びである、と一面的にとらえているわけではない。ひとり遊びの工夫も、子どもたちの活動に対する興味・関心を喚起し、継続するためにも積極的に評価した。その中で、個々の遊びに対する工夫が、他の子との関わりを生むような（集団遊びにつながるような）ものを、特に意識して取り上げ、紹介していったのである。

(4) 指導内容と計画（全15時間）



資料1 子どものふりかえり

(5) 支援と子どもの様子（取り組み全体を通して）

①については、使いやすさを考え、段ボール・新聞紙・広告紙・フィルムケース・紙筒・食べ物の容器・ペットボトルを中心に、収集を指示した。スーパーなどに行き、材料集めそのものを楽しむ子もいた。準備や片づけの際に材料を大切に扱おうとする姿勢が見られ、取り組みが進むにつれ、気に入った材料を家に持ち帰って遊ぶ子どもが増えた。材料は勿論、遊びそのものを大切に考えることができたことには意義がある。また、給食で出るゴミも利用しようとするなど、何でも遊び道具にしてやろうという意欲や、物に対する興味・関心が高まった。

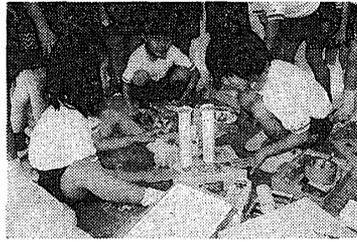
②⑧を繰り返して行い、書いたプリントを掲示してお互いが見合うことで、さまざまな遊びの工夫が広がった。また、オープニングセレモニーを行うことで、子どもたちの意識が高まり、活動意欲と見通しがもてた。さらに、④⑤⑦の支援も加えたことで、当初は単一の材料のみを使った遊びに偏りがちだったものが、複数の材料を組み合わせた遊びに変化していった。材料の特性を生かし、材料にあった遊びを考えるようにもなった。その結果、友だちと材料やアイデア、遊び道具を融通し合い、活動の仕方も工夫できるようになっていった。

③に配慮し、活動時は必ず体育館を確保した。子どもの発想を受け入れることのできる場所という点を優先した。場所に依拠して遊びを工夫ができることも大切だが、それは学級活動のお楽しみ会でも取り組むことが可能である。

子どものアイデアをいくつか紹介する。

(例1 / フィルムケース運び競争)

沢山のフィルムケースを入れたカップ麺の容器を紙筒で支え、こぼさないように運ぶレース。チームを作ってリレーをしていた。



(例2 / 広告紙を使った箱庭作り)

園芸広告を切り抜いて、箱の中に家と庭を作り、如雨露も作って、花壇遊び。フィルムケースを人形に見立てていた。



(例3 / 戦車や武器作り)

段ボールで戦車を作り、紙筒に詰めたフィルムケースを後ろから押しだして、大砲の弾とした。ペットボトルはロケット砲らしい。紐が付いて、飛ばしてもたぐり寄せることができる。

(例4 / 紙相撲)

よく振動する箱を選び、昔ながらの紙相撲を作った。

(例5 / オーケストラ遊び)

音の出る材料を楽器に見立て、音楽を楽しんだ。

(例6 / スポーツ遊び)

野球、ホッケー、ボーリング、テニスなど。必ずしも材料に手を加える必要はない。手を加えていない材料を何かに見立て、ごっこ遊びをすることも、積極的に評価した。その中で、大きな遊び道具を作ることは、特に奨励した。材料の数や手間から、どうしても何人かで協力する場面が増えるからである。

3 成果と課題

本実践を通じて、子どもたちが他の子がしていることを意識するようになったことを感じる。自分のしたい遊びを大きな声で主張したり、一緒に遊ぶ仲間を誘ったりする姿が目立つようになった。朝や帰りの会でのパフォーマンスコーナーへの参加は、個人ばかりだったのが、グループが増えた。資料2の子は普段から友だちと一緒に遊ぶことが苦手で、一人であることが多い子である。最初は、人形遊びや貯金箱作りなどをしていたが、この資料からわかるように、友だちに働きかけようとする気持ちが出てきた。彼女にとっては、大きな変化と言える。

勿論、課題もある。自分の遊びに没頭するあまり、周囲の様子が見えず、独りよがりな行動をとる子、まだひとりで遊ぶことの多い子、特定の友だち以外を仲間に入れることができない子、実態はさまざまである。しかし、1年生という発達段階から考えて、ある意味では自然な状況であり、このこと自体が生きた教材である。もともと遊ぶという活動は、子どもたちの生活の本質であり、例えば、休憩時間や登下校時などでこそ、本来の自然な関わりが育つ。「総合的な学習」をより大きな範囲でとらえ、普段の学級などでの活動の中に、「人と人との関わり」の場を意識して取り入れることで、学級経営そのものを「総合的な学習」の一部として、リンクさせていく必要がある。



左上 例4 紙相撲

左下 例3 戦車

右 例1 フィルムケース



資料2 子どものふりかえり